

松山元基『驅魔比丘 初篇』における井上円了批判

佐藤 厚

松山元基『驅魔比丘 初篇』における井上円了批判

佐藤 厚

専修大学ネットワーク情報学部兼任講師

一 問題の所在

明治中期から大正半ばにかけて活動した仏教哲学者、教育者である井上円了(以下、円了。一八五八—一九一九)は、哲学の立場から仏教の価値を認めキリスト教を批判した。明治二〇年に刊行した『真理金針』はその代表作である。ところで明治時代に活動した真宗僧と考えられる松山元基(生没年不詳)は、明治二四年に刊行した論文『驅魔比丘 初篇』の中で、円了が『真理金針』の中で仏教とキリスト教を同一視していることを批判する。通説ではキリスト教批判論者として知られる円了が、仏教とキリスト教を同一視するとして批判されるとはどういうことか。本論文では、当該論文を読み、その批判を端緒として円了の『真理金針』の主張、論理を再検討する。本研究の意義は、第一に、これまで知られていなかった円了批判を紹介することにより、円了研究、近代日本宗教史研究

に材料を提供すること。第二に、円了のキリスト教に対する態度を再考する契機を得ることである。

二 『真理金針』について

(一) 概要

円了は安政五年(一八五八)、現在の新潟県長岡市に真宗大谷派の寺院の長男として生まれた。一〇歳で明治維新を迎えたが、それは円了にとって苦難の時代の始まりであった。すなわち維新後に起こった戊辰戦争では、旧幕府側であった長岡藩は敗れた。さらに同じく維新後に起こった仏教弾圧運動である廃仏毀釈において仏教界は打撃を受けたのであった。そんな中、円了は一六歳から長岡洋学校に通って西洋式学問を学ぶ中で頭角を現し、宗派の優秀な子弟として選抜されて一九歳には京都に設けられた宗派の師弟を教育する学校の教師を養成する学校に通うことになり、さらに翌年には、設立間もない東京大学に入学することになったのである。東京大学で哲学を専攻した円了は、西洋哲学の中に真理を見出し、その立場から宗教を検討してみると、キリスト教は真理に合致せず、仏教が真理と合致することを知った。そこで在学中から仏教系新聞に、キリスト教の非真理性と仏教の真理性について論じる論説を掲載したのであった。のちにそれをまとめて刊行したのが『真理金針』である。

『真理金針』は次の三部からなる。

- 一、余が疑団いずれの日にか解けん
- 二、第一論文 耶蘇教を排するは理論にあるか
- 三、第二論文 耶蘇教を排するは実際にあるか

四、第三論文 仏教は智力・情感両全の宗教なり

「一 余が疑団いずれの日にか解けん」は全体の序文にあたる。ここでは仏教者のキリスト教や科学に対する考
え方の類型を挙げるとともに、それらの問題点を指摘する。続いて①キリスト教、科学、哲学を恐れなければなら
ない理由、②憂うる必要がない理由、③キリスト教などに対して仏教を弘めるべき方法、を問題設定する。「ヤソ
教を恐れるべき理由」で問題とするのは、キリスト教自体の問題ではなく、キリスト教を知ろうともしないで恐れ
たり見下したりする仏教者側の姿勢である。加えて円了が問題とするのは、仏教者がキリスト教を批判するのは理
論だけに止まることである。円了が見るに、キリスト教を排斥する第一の手段は理論ではなく実際である。もちろ
ん理論と実際は両方ともに必要であるが、現段階の社会では実際が優先される。これに対して理論だけを優先させ
る仏者に、それが第一義ではないことを知らせるために「耶蘇教を排するは理論にあるか」、「耶蘇教を排するは実
際にあるか」という問題を設定する。

「二、第一論文 耶蘇教を排するは理論にあるか」では、キリスト教を排除する方法は理論的によることが考え
られるが、それだけでは不十分である。それは両者が「宗教」という面では同じだからである。ただ仏教とキリス
ト教の教えの優劣はある。そしてキリスト教の不合理な部分として地球中心説、人類主長説、自由意思説など、キ
リスト教が不合理である部分を十二個列挙する。

「三、第二論文 耶蘇教を排するは実際にあるか」では、キリスト教を排除するためには実際の社会的効果を
もつことが必要であることを説く。

「四、第三論文 仏教は智力・情感両全の宗教なり」では、仏教は人間の知性的な部分と情感的な部分とを二つ
備えており、情感的な部分しかもたないキリスト教よりも優れていることを説く。

ここを見ると、本書では仏教とキリスト教の同一性も説くが、基本的に仏教の優越を説いている。この中の同一性の部分を松山は批判するのである。

(二)「真理金針」冒頭部分

松山の批判を見る前に、問題となる『真理金針』の冒頭部分を見る。長いので6つに区切り、原文と解説を付した。原文の中に〔①〕などと表示するのは、松山が問題とする部分であり、引用される文章には傍線を付した。また丸カッコは松山は省略している部分である。

・原文(1)

ヤソ教を排するは理論にあるか。余これに答えて理論をもつてヤソ教を排すべしといえども、排し尽くすあたわずといわんとす。その理多言を要せずして明らかなり。

〔①〕ヤソ教も一種の宗教なり、仏教も一種の宗教なり。非宗教者よりこれを対すれば、両教共に一範圍中の朋友なり、兄弟なり。〔②〕ヤソ教の目的はすなわち仏教の目的なり、仏教の本意はすなわちヤソ教の本意なり。(仏教ひとり安心立命を唱えて、ヤソ教これを唱えざるに非ず。ヤソ教ひとり勸善懲惡を説いて、仏教これを説かざるに非ず。けだし安心立命と勸善懲惡とは、両教の宗教たる目的本意にして、その世に宗教の名を得るゆえんなり。つぎにその目的を達する方法に至りては、二者もとより異なるきあたわずといえども、なお両説の一に帰するもの少なからず。仏教にては靈魂不死を説く、ヤソ教またしかり。仏教にては來世の苦樂を談ず、ヤソ教またしかり。仏教にては人間以上に位し、人知以外に存するの体あることを論ず、

ヤソ教またしかり。これみな) 両教その帰を同じうするところなり。

解説…冒頭の「ヤソ教を排するは理論にあるか」は、キリスト教は理論によって排除することができるか、という問いである。これに対して円了は理論によって排除することができるであろうが、排除しつくすことはできない、という。以下はその理由である。まず〔①〕ではキリスト教も仏教も宗教という面では同じだからだという。続く〔②〕では目的と本意はキリスト教も仏教も同じであるという。『驅魔比丘』で省略されるカッコ内の部分は、同じ例として、安心立命、勸善懲悪などの考え方をいう。そして最後に両教はその帰結する所を同じくするという。

• 原文 (2)

しかしてただその異なるは、一は因縁を説き一は創造を立つるにあり、一は三世を談じ一は二世にとどま
るにあり、一は仏をもつて主体に名付け一は神をもつて本体とするにあり、一は釈迦をもつて教祖とし一は
ヤソをもつて教祖とするにあり、一は大小両乗をもつて教相を分かち一は新旧両約全書をもつて本経とする
にあり、その他詳細に至りては、いちいちその異同を挙ぐるにいとまあらず。かく両教相反するところあり
といえども、これを前条の両教同一に帰する諸点に比すれば、枝葉の末説のみ、付属の方法のみ。

解説…ここでは両教が異なる部分として、仏教が因縁説、キリスト教が創造、などの考え方の違いであるという。

そして最後には、それらの違いは同一に帰する部分からすれば枝葉の末説であるという。

• 原文(3)

〔③〕 第一の目的、第一の方法、およびその基本の極意、真理に至りては、両教互いに相排棄するを得ず。われよりかれを排するは、われ自ら排するなり。かれよりわれを駁するは、かれ自ら駁するなり。故に各教の論者、真理を討究してこの点に達すれば、互いに相合同一致せざるべからず。

しかしてこれに反対せる非宗教、すなわち理学中の唯物無心論等に対して、互いに相協心同力して共に宗教の宗教たる真理を立てざるべからず。これ余が両教をもつて兄弟なり、朋友なりとするゆえんなり。⁽⁴⁾

解説…ここで話が両者の共通の部分に戻る。そして基本の極意、真理においては、両者は同一であるという。それに対して宗教自体に反対する科学の唯物無心論に対しては、両教が共通して宗教の真理を打ち立てるべきである。これが両教が兄弟であるという理由であるという。

• 原文(4)

一 例えばここに一家あり、日々兄弟の間に争論を生じ、互いに相離れんとするの勢いあるも、いったん隣家と争議を起こすに当たっては、一家中の兄弟たちまち同心協力して、隣家と相抗するに至る。もしまた隣村

の間に争論を發することあらば、隣家とたちまち回合助力して、隣村と相拒むに至るや必せり。一家に対すれば隣家はことごとく敵なりといえども、隣村に対すればみな兄弟なり、朋友なり。いったん隣村との間、ことを生ずるに至らば、一村ごとごとく一致共同して、隣敵に抗抵するのいかんを思わざるべからず。

従来わが仏教中争論を起こし、大乘は小乗と争い、一乘は三乘と争い、華嚴は天台と争い、浄土は聖道と争うがごとき、みな一家中の争論なり、兄弟間の不和なり。今やヤソ教の外敵、仏教の藩籬にせまるをもつて、仏教中各宗各派の争い、いわゆる兄弟の争いはたちまちやみ、互いに相協心合力して外敵に抗争せざるべからず、これ昨今の勢いなり。⁽⁵⁾

解説…ここでは、もしも普段争っているものが、共通の敵が来たならば、協力しなければならぬことを説く。

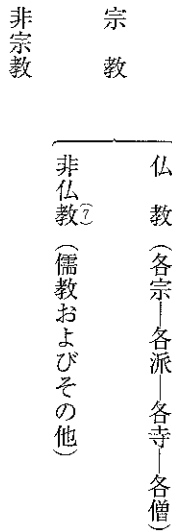
• 原文 (5)

〔4〕 今後もし非宗教者より宗教を駁するに至らば、われまた今日抗敵とするところのヤソ教と共和合同して、互いに相助けざるべからず。このときに当たりては、ヤソ教はわが同朋なり、わが兄弟なり。なお隣村と相争うにあたりては、隣家と相合して互いに相助けざるを得ざると同一理なり。⁽⁶⁾

解説…非宗教者から宗教を批判することがあれば、キリスト教と共和合同して助け合わなければならないという。

故に〔5〕余、左の図をかかけてわが敵とするところ、ひとりヤソ教のみに非ざるゆえんを示さん。

教学大系



すなわちわが第一敵は非宗教にして、すべて宗教とその主義を異にする理学哲学の類これなり。これに対すれば、ヤソ教も仏教も共に同朋同類となる。もし宗教範囲内にありてこれを論ずれば、ヤソ教始めてわが敵の一となる。故にヤソ教はわが第二の敵なり。つぎに仏教中にありて自宗より他教をみれば、またわが敵なり、これを第三の敵とす。つぎに他派をもつて第四の敵とし、他僧をもつて第六敵とす。その条、左のごとし。

第一敵 非宗教すなわち理学、哲学、その他すべて宗教を駁するもの。

第二敵 ヤソ教、回教、ユダヤ教、儒教、神教の類。

第三敵 他宗すなわち八宗中自宗の外の諸宗をいう。

第四敵 他派すなわち一宗中自派の外の諸派をいう。

第五敵 他寺すなわち各寺中自院の外の諸寺をいう。

第六敵 他僧すなわち僧侶中自身の外の衆僧をいう。

自己一人よりこれをみれば、世界みな敵ならざるはなし。

解説…ここでは敵と味方のレベルの違いを六つの層によって述べる。第一敵は非宗教と宗教の対立。この中では同じ宗教であるキリスト教と仏教は仲間。第二敵は宗教間の対立。この中ではキリスト教と仏教は敵。第三敵は仏教の宗派間の対立。自宗に対して自宗以外は敵。第四敵は派間の対立。自派に対して自派以外は敵。第五敵は寺間の対立。自分の寺に対してそれ以外は敵。第六敵は僧侶間の対立。自分に対して自分以外は敵ということである。

以上、『真理金針』冒頭部を見てきた。ここだけを見ると、宗教という枠組みの中で仏教とキリスト教を同じものと見、非宗教に対して反対するということでは共同すべきことが繰り返して説かれている。では松山の批判を見ていく。

三 松山元基と『驅魔比丘 初篇』

松山元基がどのような人物か詳しいことはわからない。いくつかの情報を手掛かりにすると、岐阜に居住した真宗の僧侶で、排耶論に積極的な人物のようである。『驅魔比丘』の奥付には「岐阜県平民僧／松山元基／安八郡今尾町六百四十八番戸」とあることから岐阜に在住した僧侶であることがわかる。さらに『驅魔比丘』の中に「我宗祖」という言葉で親鸞の『正像末和贊』を引用することから、真宗の人であることは間違いないであろう。

また明治八年（一八七五）に松山は仏教系新聞である『教義新聞』に投稿しており、そこではキリスト教と仏教とを併用することを説く見解に対して反対の主張を行っている。ここからキリスト教批判論者、すなわち排耶論の

論者と見られる。⁽⁹⁾このように明治前半から半ばにかけて活動した、岐阜県に住んでいた真宗の僧侶というのが現時点で知りえる情報である。

続いて著作である『驅魔比丘』という書物を見ていく。これは全体が一〇頁からなる小冊子で、国会図書館のデジタルライブラリで閲覧できる。⁽¹⁰⁾奥付には「明治二四年五月二五日御届／全年六月一日出版」とあるも「非売品」とあるから市場には流通しなかつたとみられる。また奥付には松山と並んで「全県士族／森直一／岐阜市秋津町八番戸」という人名と住所が書かれているが、どのような人物かはわからない。表題に「初篇」と記されていることから、当初は続編を構想していたと考えられるが、実際に刊行されたかは不明である。

『驅魔比丘』という題名は、魔比丘すなわち仏教に害となる僧侶を驅逐するという意味であろう。ここで仏教に害となる僧侶とは円了を指す。

四 『驅魔比丘』における円了批判

では『驅魔比丘』の内容を見ていく。全文の翻刻を巻末に掲げたので、原文はそれを対照させながら見ていただきたい。

まず序にあたる部分では、現在世の中にキリスト教批判の書物が多いが、中にはおかしいものもあり、井上甫水(円了)の『真理金針』もその中の一つである。真理を明確にしようとして逆に真理を失っている。自分は一読してがっかりし、小冊子を作ったという。

続いて『真理金針』から冒頭部分を五か所引用し、問題点を指摘しながら批判している。以下説明する。

●問題第一

問題とする『真理金針』原文は、前に掲げた〔①〕である。円了は「ヤソ教も一種の宗教なり、仏教も一種の宗教なり。非宗教者よりこれを対すれば、両教共に一範圍中の朋友なり、兄弟なり。」として、キリスト教を排撃しつくせない理由として、キリスト教も仏教ともに宗教であるから、という。

松山はこれに対して、両教がともに宗教だから兄弟朋友というのは仏教を知らない者の考えである。なぜならキリスト教は邪宗、仏教は正宗である。キリスト教は一神の能造から起り、仏教は因縁業成からなる。その理が全く異なるのにどうして兄弟朋友ということができようか。あなたはみだりに「宗教」という一語で兄弟朋友と名付てはならない。あなたのように仏門で暮らしながら仏教とキリスト教とを兄弟といえは、聞く人はその違いがわからなくなるであろう。つまりその説は仏耶兄弟の説が出て破邪顕正の仏教の真理が無くなってしまう。宗祖親鸞は、「造悪を好む弟子たちの邪見放逸が盛んであり、末世に自分の法を滅ぼしてしまおうであろう」と言ったが、それはあなたの説をいうのだ、と批判する。

●問題第二

問題とする『真理金針』原文は前掲〔②〕である。円了は、「ヤソ教の目的はすなわち仏教の目的なり、仏教の本意はすなわちヤソ教の本意なり。」として両教の目的、本意が同じであると述べていた。

それに対して松山は、仏教の目的とキリスト教の目的は全く異なる、と説く。つまり仏教の目的は三界を出過することであるが、キリスト教の目的は「迷中卑屈」の生天であるという。仏教の本意は一切智一切種を開悟させる界外無漏の妙境界であり、それはキリスト教でいう、わずかに地獄の苦毒を免れて生天を本意とするものとは氷炭

54 の異なりがあるという。その他、「婦」という言葉についても両教の違いを子細に挙げ円了を批判する。

・問題第三

問題とする『真理金針』原文は前掲の〔③〕である。円了は「第一の目的、第一の方法、およびその基本の極意、真理に至りては、両教互いに相排棄するを得ず。われよりかれを排するは、われ自ら排するなり。かれよりわれを駁するは、かれ自ら駁するなり。」と述べた。

これに対して松山は、「極意、真理に至りては、両教互いに相排棄するを得ず」とはどういうことか。キリスト教の真理と仏教の真理とは全く異なる。彼は一神の造化、わが仏教は因果応報であり、その性質が異なるから、わが真理をもってキリスト教を廃棄すればとて、自分が自分の真理を廃棄する理は存在しない。あなたのように宗教という一語に執着して、兄弟、朋友と呼び、真理一致とするのは平等を知って差別を知らないことである、として批判する。

・問題第四

問題とする『真理金針』原文は前掲の〔④〕である。円了は「今後もし非宗教者より宗教を駁するに至らば、われまた今日抗敵とするところのヤソ教と共和合同して、互いに相助けざるべからず。このときに当たりては、ヤソ教はわが同朋なり、わが兄弟なり。」として、非宗教者から宗教を批判することがあれば、キリスト教と共和合同して助け合わなければならないという。

これに対して松山は、非宗教者からの攻撃に対してどうしてキリスト教と共同しなければならないか。キリスト

教がなくとも仏教だけで非宗教者に対抗することができる。あなたの論は、仏教の真理が諸教に超越する無上殊勝な妙法であることを知らない、キリスト教に心酔した者の愚論である、と批判する。

・問題第五

問題とする『真理金針』原文は、前に掲げた〔⑤〕である。ここで円了は敵と味方のレベルの違いを六つの層によつて述べていた。第一が宗教と非宗教、第二が仏教と非仏教、第三が自宗と他宗、第四が自派と他派、第五が自分の寺院と他人の寺院、第六が自分と他人である。松山は、この六つのレベルの中、第一と第二、すなわち宗教と非宗教、仏教と非仏教は認められるが、第三以降は仏教内部の話である。どうして同じ仏教の中なのに敵とするのか、といいながら、「狂者の憑狐とは汝がことなるべし」と強く批判する。

最後に、自分はこの魔説を見て黙することができず、その非をあげて批評を下し、人々の参考にするという。これ以外にも真理を失うものが多いが、次編で詳しく述べるといふ。

以上、松山の批判を見てきたが、内容について考えてみたい。松山が批判するのは、円了がキリスト教と仏教の共通性を強調していた部分であった。ただ不思議に思うのは、『真理金針』ではその後にキリスト教が不合理であることを縷々述べている。この部分には言及せず、その前段階の部分だけをとりあげて批判するのはどういうことだろうか。見てはいたとしても、仏教とキリスト教を同一視する部分がよほど許せなかったのか。

それはともかく、続いて「宗教」という概念について考えてみたい。現在では仏教、キリスト教の上位概念として「宗教」というメタ概念を置くがそれは明治時代以後のことである。そのように見ると「宗教」という共通項を見ていく円了は新思想で、そうした見方をとらない松山は旧思想ということもできよう。そこから松山の批判は、

旧思想から新思想に対して行った批判と評価することもできよう。

ただ、仏教とキリスト教とを正教と邪教というようにきつぱりと区別し、非宗教からの攻撃に対しても、キリスト教と連合する必要はなく仏教だけで十分であるという松山の批判を見ると、確かにそうかもしれないという気もしてくる。松山にとって仏教とキリスト教はどこまでも区別されるものであり、それらをつなぐ宗教という概念は必要としない。我々は現在、宗教の概念のもとに仏教やキリスト教という個別の宗教があると考えるが、こうした考え方は普遍的なものではないのではないか、必要としない人には必要がないのではないか、という気もするのである。この点が、松山の批判を通して考えさせられる点である。

四 『真理金針』の読み直しの必要性

もう一つ考えさせられる点は、円了における仏教とキリスト教の同異についてである。今回問題したような、仏教とキリスト教との同一視については、従来の『真理金針』の解説では触れられず、それよりも地球中心説、人類主長説、自由意思説など、キリスト教が不合理である部分を十二個列挙し、自然科学の立場からキリスト教を批判している部分が注目され、それにより円了がキリスト教を批判する部分により焦点が当てられてきたように思われる。

あるいは哲学の立場から仏教とキリスト教を位置付けようとしたという観点である。例として小林忠秀は『井上円了選集』第一巻の解説で次のように述べている。

円了は、単にキリスト教という宗教に対抗させて仏教という宗教を推し立ててこれを批判するのではなく、二つの宗教あるいはそれぞれの宗教的信条に基づく世界観を俯瞰できる視点から批判を展開しているのである。その視点とは、円了のいわゆる「学理」である。「学理」とは「真正純然の真理」を究める営み、すなわち哲学であり、なかならず「純正哲学」の営みである。そして「純正哲学」とは「形而上の純理を論究する」ところの哲学的営為と説明されている。したがって、円了は仏教とキリスト教を同一の舞台に於いて眺め渡せる視点を、哲学あるいは形而上学に見出していることになる。⁽¹⁾

これは哲学という立場から仏教とキリスト教徒を眺めているということである。それはそうだが、これでは今見た部分の説明としては不足していると思われる。我々は『真理金針』冒頭部をもう一度丁寧に読み直し、その中で円了の排耶論をとらえなおさなければならぬと思う。すなわち松山の批判は、その主張とともに、これまで我々が気付かなかつた円了思想の構造を気づかせてくれたといえる。

五 まとめ

以上、松山元基『驅魔比丘』を概観し、そこに説かれる円了批判を見てきた。まとめると次のようになる。

第一に、松山元基は岐阜県在住の真宗の僧侶で、詳しい経歴は不明であるが、『驅魔比丘』の内容からキリスト教批判すなわち排耶論者であることがわかる。

第二に、『驅魔比丘』は円了批判の書物である。松山の批判の中心は、円了が『真理金針』の中で、仏教とキリスト教を同一視するところにある。松山は、仏教とキリスト教は正教と邪教の区別があるのであり、「宗教」とい

う一語で軽々しく同一視してはならないという。

第三に、円了は通常排耶論者と捉えられてきて、そこから仏教とキリスト教とを同一視する考えはどのような位置付けられるか再検討の必要がある。とくにキリスト教、科学、哲学との関連で、『真理金針』をもう一度読み直す必要性がある。

註

1 筆者は以前から円了に対する批判に注目している。批判の論点を見ることにより、従来わからなかった円了に対する見方や思想的な位置を知ることができるからである。佐藤厚「鈴木大拙の井上円了批判」(『国際井上円了学会』『国際井上円了研究』五、二〇一七年)

2 井上円了『真理金針』(井上円了選集) 卷一、一六頁

3 同前

4 井上円了『真理金針』(井上円了選集) 卷一、一六頁—一七頁

5 井上円了『真理金針』(井上円了選集) 卷一、一七頁

6 同前

7 「非仏教」を選集では「非宗教」としているが、明らかな誤植である。

8 井上円了『真理金針』(井上円了選集) 卷三、一九八七年) 一七頁、一八頁

9 『教義新聞』明治八年四月一九日付「貴社新聞第百二號、教義至言第四今川氏云々ノ説ヲ見テ、井蛙ノ管見モ云ハザルヲ得ズ、其故ハ、今川氏ハ玉石ヲ併テ拒絶スルコトヲ歎惜セラレ、而シテ玉石ヲ併テ用ユルノ大害有ルコトヲ知ラザル者ニ似タリ、今川氏ノ云ヘル、若洋教ノ所謂父トハ造化ノ天神ヲ云也、生父母ニ非ズトスルカ、若天神ヲ以テ父ト稱スルニモセヨ、其父母ヲ敬セヨ其父母ヲ愛セヨノ言アルトキハ亦以テノ輔翼トナスニ足ル者ト云ハザルベカラズ云々、今云、若此説ノ如クナラバ、父母ト云モ剋実シテ論ズルトキハ、生父母ヲ敬愛スルニ非ザルベシ、然則、儒教佛教ニ云トコロノ父母敬愛ノ説トハ、其名同シテ、其意霄壤也、是玉石ヲ併テ用ユルノ害ニ非ズヤ、今川氏ノ玉石ヲ併テ拒絶ヲ歎惜セラル、ハ佳也、而シテ玉石ヲ併テ用ユルハ不佳也、想ニ今川

氏ハ世ノ玉石ハ知レドモ教義上ノ玉石ヲ知ラザル人ナラン、嗚呼教義ノ至言ヲ云ハントセバ、今一層大活眼を開クベシ、若不爾則
 □ヲ鼻ノ如クナラシメテ他ノ至言ヲ待ヘシ、譏笑ヲ不顧、貴社ノ余白ヲ穢ス者ハ岐阜縣松山元基也」『明治仏教思想資料集成』（同
 朋舎出版、一九八二年）四八八頁―四八九頁

10 松山林外（元基）著『驅魔比丘』初編、松山林外、明二四・六・国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/816397>（参照 一〇三三・〇八・一一）

11 小林忠秀「解説」『井上円了選集』第一巻、四四九頁から四五〇頁

参考文献

• 一次文献

松山元基『驅魔比丘 初篇』（明治二四年）

井上円了『真理金針』（井上円了選集）第一巻、一九八七年）

• 二次文献

三浦節夫『井上円了』（教育評論社、二〇一六年）

附録・翻刻『驅魔比丘 初篇』

• 凡例

• これは『驅魔比丘 初篇』の翻刻である。

• 原文には句読点がないが読み易さを考慮して句読点を入れた。

• 漢字は新字にした。不明字は■にした。

• 引用文献と引用文には「『、』」を付けて表示した。

• 『真理金針』原文は二字下げにした。

• 明らかに脱字と思われるところは文字を挿入して「」を付けた。

• 内容理解の便の為、「問題一」などの見出しを補った。

(一頁)
驅魔比丘

松山林外著

古人既云、「尺信書、不如無書」ト、宜哉。輒近、駁邪ノ書多シト雖モ、往々誤レルモノ不尠。就中、井上甫水ナル者ノ著セル『真理金針』ノ如キハ、所謂似テ非ナル者ニシテ、真理ヲ確明スルニ似テ、却テ真理ヲ失フニ至ル。悲哉、余一読シテ長太息、溢レテ一小冊子ヲナル。名ケテ「驅魔比丘」ト云。或人曰、「自家撞着ノ謗リヲ免レス」ト。故ニ余、不問ニ附セント欲ス。爾ルニ動モスレハ邪教ノ跡ヲ仏教ニ混センコトヲ恐レ、顧慮焦心措ク能ハス。曾テ聞ク、他人門前ノ草ヲ拔ンヨリ自家席上ノ塵ヲ払ヘノ古語ニ基キ終ニ粹ニ上ス。今、同朋諸彦ニ頒テ、余カ鄙見ニ正斧ヲ加ヘ玉ハンコトヲ乞フ。

〔問題一〕

(二頁)『真理金針』初編曰、「耶蘇教モ一種ノ宗教ナリ、仏教モ一種ノ宗教ナリ非宗教ヨリ之二對スレハ兩教共ニ一範圍中ノ朋友ナリ兄弟ナリ」云々。

詰曰、耶蘇教モ仏教モ共ニ宗教ナルカ故ニ、兄弟朋友ノ説ヲ作スハ、仏教ノ真理ヲ知ラサル魔属ナルヘシ。何トナレハ、彼レハ邪宗、是ハ正宗ナリ。彼レハ一神ノ能造ヨリ起ル、此ハ因縁業成ヨリ成ス。其理、天淵ノ相違アルモノ、何ソ兄弟朋友トスルコトヲ得ンヤ。汝、猥リニ宗教ト云ヘル一語ヲ以テ、兄弟朋友ト【名】クヘカラス。釈迦所説ノ法門八万四千、或ハ兄弟朋友ト名クルコトアルト同一視スヘカラス。是其數八万四ナルモ、同一師ノ金口ヨリ出ルカ故ニ兄弟ノ名ヲ與フルモ宜ナリ。耶蘇教ノ如キハ自ラ宗教ト称スルモ、何ソ吾ヨリシテ(三頁)兄弟朋友

ト称スルコトヲ許サンヤ。假令、非宗教者ヨリ兄弟ノ名ヲ与フルモ、吾ヨリ決シテ許ササルトコロ也。汝、仏者ニシテ好シテ非宗教者對望ノ説ヲ搆ヘテ兄弟ノ称ヲ立テ、厭ハサルハ、仏教ノ真理ニ暗シト云ヘシ。爾レハ仏耶兄弟ノ説ヲ作ス者ハ、仏者ニ非スト針砭スルトコロ也。汝カ如キ、仏門ニ衣食シナカラ、仏耶兄弟ノ説ヲ作サハ、是ヲ聞ク者何レヲ信スルモ是非アルヘカラスヤ必セリ。爾則、仏耶兄弟ノ説出テテ、破邪顯正ノ仏教ノ真理忽焉トシテ去矣。往昔、魔属誓テ曰、「末世ニ汝カ衣ヲ着、汝カ食ヲ食ヒ、汝カ法ヲ滅サン」ト、今、汝カ説ヲ見テ魔属、我牆蕭内ニ入り、毒ヲ千歳ニ流スヲ知ル、汝ハ即今日ノ魔比丘、驅ラスンハ不可有、宗祖曰、「造悪コノムワカ弟子ノ邪見放逸サカリニテ、末世ニワカ法破スヘシ」(四頁)ト、「蓮華面經」ニ説タマフ。「邪見放逸」トハ、汝カ如キ説ヲ作ス者ヲノ玉フ也。祖門ニ衣食スル者、鼓ヲ撃テ攻メスンハ不可有。

(問題二)

『真理金針』初編(十紙)曰、「耶蘇教ノ目的ハ仏教ノ目的也。仏教ノ本意ハ即耶蘇教ノ本意也。乃至、両教、其帰ヲ同フスル所ナリ。」云々

詰曰、耶蘇ノ目的ト仏教ノ目的ト同シト云ハ何コトソヤ。汝カ如キハ仏教ヲ見サル者ノ如シ。争テカ真理ヲ窺フコトヲ得ンヤ。汝、謹テ聞クヘシ。仏教ノ目的ハ即仏ノ目的也。仏教ノ本意ハ即仏ノ本意也。仏智見ハ二乘非所識唯仏獨明了、何ソ外道魔属ノ窺ヒ知ルトコロナランヤ。仏ノ目的ハ出過三界道、耶蘇教ノ目的ハ迷中卑屈ノ生天ニアリ。何ソ目的同シト云ヤ。又仏ノ本意ハ一切智一切種ヲ開悟セシムル境界外無漏(五頁)ノ妙境界也。耶蘇教ニ云フトコロノ、僅ニ地獄ノ苦毒ヲ免レテ生天ヲ本意トスル者トハ氷炭ノ異也。何ヲ以テ耶蘇教ノ本意ハ仏教ノ本意ト云ヤ。又両教帰ヲ同フスル所ナリトハ何コトソヤ、仏教ニハ、帰敬三宝ト云アリ、廻三帰一ト云アリ、又翻邪帰正ア

リ、婦命アリ、婦入アリ、婦向アリ。耶蘇教ニ云トコロノ婦トハ如何ナルモノソヤ。恐クハ、前ニ云トコロノ仏教ノ婦トハ同シカラサルヘシト信スル也。或人曰、教意ノ結婦スルトコロヲ云ナラント云々、是仏教ノ結婦スル所ヲ知ル者ノ言ニアラス、吾カ仏教ノ結婦スルトコロ、三世因果、勸善懲惡、轉迷開悟ニアリ。耶蘇教ハ三世因果ヲ説カス、勸善懲惡ハ説ケトモ其名同フシテ其結婦スル所大ニ異ナリ。耶蘇教ノ結婦スル所、生天ニアリ、吾仏教ノ所談ヨリ見レハ、迷中（六頁）ノ甚シキモノ也。何ソ婦同シト云ヤ

〔問題三〕

〔真理金針〕初編（十一紙）曰、「第一ノ目的、第一ノ方法、及ヒ其基本ノ極意、真理ニ至テハ兩教互ニ相排棄スルヲ得ス。我ヨリ彼ヲ排スルハ、我自ラ排スルナリ。彼ヨリ我ヲ駁スルハ彼ヲ駁スル也」。

詰曰、「極意真理ニ至テハ兩教互ニ相廢棄スルヲ得ス」トハ何ノ謂ソヤ。彼レカ真理トスルトコロト吾真理トハ霄壤ノ異ナリ。彼ハ一神ノ造化、吾仏教ハ因果応報、其性質ヲ異ニスレハ、吾真理ヲ以テ彼ヲ排棄スレハトテ、吾自ヲ排スルノ理ナキ也。汝カ如キハ、宗教ト云一語ヲ執シテ、兄弟トシ朋友トシ、真理一致ニシテ互ニ破スレハ、仰天ノ唾ト云ハ、所謂平等ヲ知テ差別ヲ知ラサル者也。先徳既ニ云ヘル、「平等ヲ知テ差別（七頁）ヲ知ラサルハ惡平等也」ト。汝カ属ヲ云ヘル也。

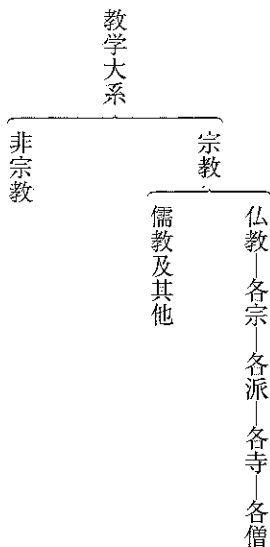
〔問題四〕

〔真理金針〕初編（十二紙）「今後、若非宗教ヨリ宗教ヲ駁スルニ至ハ、我又今日抗敵トスル所ノ耶蘇教ト共和合同シテ互ニ相助ケサル可ラス、是時ニ當テハ耶蘇教ハ我同朋ナリ兄弟ナリ」、云々。

駁曰、「非宗教者ヨリ宗教ヲ駁スルニ至レハ」トテ、何ソ耶蘇教ノ共同ヲ恃マンヤ。耶蘇教ナクモ我能ク非宗教者ニ抗敵セン。汝、耶蘇教ト兄弟トナリ朋友トナリテ、耶蘇教ヲ待テ而后、非宗教者ノ駁撃ヲ防壓スト云ハ、蒙昧ノ甚シ。仏教ノ真理ハ諸教ニ超過セル無上殊勝ノ妙法ナルコトヲ知ラサル耶蘇教ニ心酔セル者ノ愚論也。

〔問題五〕

『真理金針』初編（十二紙）「余、左ノ図ヲカ、ケテ、我敵トスル所、獨（八頁）リ耶蘇教ノミニ非ル所以ヲ示サ
ン」



第一敵 非宗教即理学哲学其他總テ宗教ヲ駁スル者

第二敵 耶蘇教回教猶太教儒教神教ノ類

第三敵 他宗即八宗中自宗ノ外ノ諸宗ヲ云

第四敵 他派即一宗中自派ノ外ノ諸派ヲ云

第五敵 他寺即各寺中自院ノ外ノ諸寺ヲ云

第六敵 他僧即僧侶中自身ノ外ノ衆僧ヲ云

自己一人ヨリ之ヲ見レハ世界皆敵ナラサルハナシ云々

詰曰、非宗教者、耶蘇教者ハ、仏敵ト称スルモ宜也。他宗ノ如キ（九頁）ハ一乘三乘、真実方便、聖道浄土等ノ争ハアリト雖モ、共ニ仏教ナレハ、仏敵ニハ非ルヘシ。他派ノ如キニ至テハ、鼻祖ハ同一ニシテ其原教ニ異義ナケレハ、敵ト称スヘキ者更ニナシ。又派内他寺ノ如キニ至テハ、教法ニ就テ敵ト称スヘキモノ、秋毫モアルコトナシ。又一寺内ニ於テ、自己ノ一身ヲ除クノ外、敵ナラサルハナシトハ何ノ謂ソヤ。狂省ノ憑狐トハ、汝カコトナルヘシ。汝カ云、第一敵第二敵ト云モノハ、仏敵トスルモ然ルヘシ。其仏敵ノ敵ノ字ヲ履テ、第三第四等ト次第シテ、仏法中ノ他宗他派等ヲ仏敵ト名クルハ何事ソヤ。況ヤ、汝カ第五敵第六敵ト名クルモノ、一派中ノ如法修行ノ者ニシテ、同一念仏無別道故ノ行者也、如何ソ仏ニ敵スルコトアラン。汝、漫ニ仏教ニ六種ヲ立ルハ愚モ亦甚シ。余、斯魔説ヲ見テ黙ス（一〇頁）ルコト能ハス。聊カ其非ヲ挙テ比評ヲ下シ、看客諸彦ノ参考ニ備ルトコト也。此外真理ヲ失フモノ居多、次編ニ之ヲ詳ニセン。